

宗教的実存を 成り立たせるもの

II

本多
弘之

HONDA
Hiroyuki

「宗教的実存」という語を、筆者が仏教の文脈において使用する場合、「菩提心」という語と、それによって獲得されるべき大乘仏教の人間像の「菩提薩埵」（略して菩薩）として生きることに対応することとして明らかにしてみたいと思う。

この場合、善導のいう「共発金剛志」（共に金剛の志を発して）（『真宗聖典』一四六頁、二三頁）という課題を少しく論じておこう。この語は、善導が菩提心の困難さに対して投げかけた謎なのである。これは「十四行偈」の「おの

おの無上心むじょうしんを發せども、生死しやうじ甚だはなは厭いといがたく、
 仏法ぶつぽうまた欣ねがいがたし」（『同』、一四六頁）という句に続いて出されている言葉である。このことは、一般的に了解されている「菩提心」はそれを発すことも、持続することも、実に困難だと押さえているということである。龍樹が『十住毘婆沙論』で『華嚴經』の十地品を解釈するに当たり、その初歡喜地の積において「難行」・「易行」を説きだしていることが、憶念されるところでもある。

『華嚴經』は、すべての求道者が大乘仏道を

歩んでいくことを、菩提心の展開として表現しているであろうが、その中心に十地の課題を置いて、一々の課題を克服すべく発心からその成就としての大菩提までを段階的に開示しているのである。『經』の文では、その初地の獲得において、「不退転」の確信が与えられることを説きだしているのだが、そこに龍樹は、難易二道があることを語っている。これは『論』の当相からは、難易のどちらを選ぶかは各々の菩薩の意欲に任せているように窺える。ただ、その選びが易行に確定するためには、恒河沙にも喩え

られるような長い歳月の求道が待たれていることに気づいて、ようやくに自己をたのみ難行による大菩提への到達が不可能であることに思い至るのだ、と言っているかのようである。

それを自己の求道上に決定してきたのは、中国の曇鸞の気づきであった。曇鸞は、長生不死を求めて仙經に迷ったのであったが、それを菩提流支三蔵に指弾され、自己の資質が凡夫であり、煩惱の支配を乗り越えることなど到底できないという見極めを通して、易行こそが龍樹の意図であることに同感し得たのである。このことは、単に曇鸞の個人的問題にとどまらなかった。それは流れとなり、道綽の思想的営為を生み出し、さらには、善導へと受け継がれていくことになった。

こうして、先の「共発金剛志」の謎を明らかにする糸口が見えてくるのである。人間に普遍的な呼びかけとして、「共発」と呼びかけていることは、いかなる意味になるのか。それには、一切の人間存在に「共通」するような「業因」と言い得る心とは、何であるか、という問題にくぐる必要がある。唯識思想の伝承に由るなら、人間の意識とは無始以来の虚妄分別であるとされる。すなわち、自我の見によって、執着を起し続けているというのである。この妄念を破り捨てて、転識得智の道を歩むのが、菩提心の修行であるとされている。しかし、その

妄念を個人的な努力で超越することは、まさに難行苦行である。阿頼耶識が大円鏡智に到達するには、三大阿僧祇劫の超時間的努力が要請されているのである。しかも、その達成が好条件に恵まれて個人の上に成り立つたとしても、大乘仏教の目的たる大菩提心の成就とは言いがたいため、唯識思想の説く個人的な努力の教えは、権教だとされるのである。個人の所与の条件がたとえ菩提への好条件に恵まれていたにしても、それは人類的な普遍的条件にはなり得ないからである。発心が「共発」であるとは、普遍的な人間の共通条件によって発起するものであるべきだからである。

とするなら、この共発は、人間の共業からもおおす普遍的条件から発起するべきことを呼びかけているのではないか。ここに、大涅槃という課題から投げかけられる『涅槃經』の難問が見えてくる。一切衆生の平等の救済とは、なかでも罪業深き「阿闍世王」に代表されるような、罪業深き「五逆・謗法・一闍提」の救済の課題であるべきだ、と。

『涅槃經』の学問を積んだ道綽に弟子入りした善導には、『観無量寿經』の注釈において、阿闍世の罪障の深層に、人類の共業的宿業とでも言うべき因縁を解き明かす必然性があった。『涅槃經』は、阿闍世の生誕の背景に、罪業の歴史があったことを語り明かしているのだが、

釈尊が自己の入涅槃を差しおいてまで、阿闍世との値遇を待っていたのは、その罪業の因縁にこそ、自分も責任を負っていて、阿闍世と共に大涅槃を得たいと願っていたからだ、と語られているのであった。

如来の月愛三昧からでている光明と如来の言葉、自己への慈悲の表現と受け止めた阿闍世は、自分が恐れおののいていた墮地獄の罪障から、一気に解放された喜びを語るに到るのである。そして、地獄に墮ちている人々を救うべく、自分は地獄の猛火を引き受けようとまで宣言するのである。

このような展開を『涅槃經』の「三病人」(五逆・謗法・一闍提)の問題にとどめず、『無量寿經』の法蔵願心の中心たる第十八願にある「唯除五逆・誹謗正法(唯五逆と正法を誹謗せんをば除く)」「同(一八頁)」の問題として考察したのが、親鸞であった。『教行信証』「信巻」において、親鸞は第十八願文とその成就文に依りつつこの問題を信心の課題として展開し、「難化の三機・難治の三病は、大悲の弘誓を憑み、利他の信海に帰すれば、これを矜哀して治す、これを憐憫して療したまう」(「同」二七一〜二七二頁)と明らかにされるのである。

(ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長)